

## 吉田初三郎「伯備沿線鳥瞰図」修復についての一考察

馬場 秀雄

吉田初三郎は、大正から昭和にかけてデフォルメされた独特の絵画技法—横長の作品で、中央部を細かく実際には見えない遠景までも描くパノラマ的描写に特徴—を駆使した観光鳥瞰図絵師である。「大正の広重」と称され日本の商業デザイナーの草分け的存在であった。吉田初三郎が描いた「伯備沿線鳥瞰図」の修復過程において得られた情報を通して、京友禅師、油絵画家、商業画家（デザイナー）へと変貌していった奇才、吉田初三郎の使用した絵具と絵画技法およびその志について考察した。

キーワード:泥絵具・ガアッシュ・にじみ止め・絵絹・染用伸子

### はじめに

長い時を経て、「経年劣化」および「損傷」を受けながらも命を保ち修復の機会を待っている作品(文化財)を目の前にして、我々修復家は写真撮影はもちろん、赤外線撮影・紫外線撮影・X線撮影などの科学的技術を駆使して調査記録および調査探求を行います。作品（文化財）をじっくり観察してさらに触れてみる事が出来る修復家は、修復処置を手仕事として捉えるだけでなく「美術史的な考え方」・「保存科学的な視点」を持って作品（文化財）と接する必要がある。美術史的な考え方とは、作品（文化財）個々の持つ特性・性質・特徴を判断して、制作当時の時代性や、作品を描いた先人の「心」に少しでも近づき、その真正性を正確に読み取ること。すなわち作品が静かに発している創造力や情報を謙虚に受け止めることである。

さらに、保存修復とは作品（文化財）のそれぞれ異なる個性を見抜き、その個性に合わせた修復方針をたて、その時点で最適・最良の素材と技術を駆使して、作品（文化財）本来の価値である「芸術性」や「表現性」を回復させ、作品（文化財）の持つ本来の表情を残そうとする処置である。これらの事を踏まえて、修復過程で得られた絵具や絵画技法の情報を考察して発表する。

### 修復対象作品

大正の「広重」と称された、鳥瞰図作家吉田初三郎（明治17年～昭和30年）が昭和5年（46歳）に描いた絹本著色「観光鳥瞰絵図面」でベニヤ額下地の形態になっている。

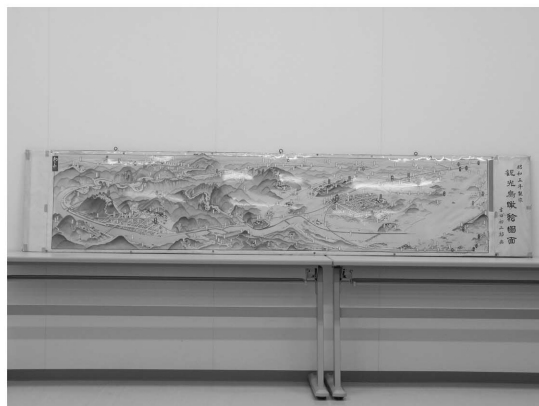


図1 修復前 表



図2 修復前 裏



図3 昭和5年制作観光鳥瞰絵図

### 作品寸法

本紙縦 54.5cm 本紙横 242.2cm

### 損傷状況

本紙料絹(絵絹画面)には裏打ちが施されず、絵絹の耳(両端)が付いてまま、額下地であるラワンベニヤの上に新聞紙および洋紙を敷き、その上に画鋏で押さえられている。そのため画鋏による穴やさびの付着が見られる。全体をビニールで覆ってあるために外部からの汚損は防げたが、本紙料絹(絵絹画面)が蒸された状態になり、絵具の定着が脆弱になり浮上・亀裂・剥落が多く見られる。

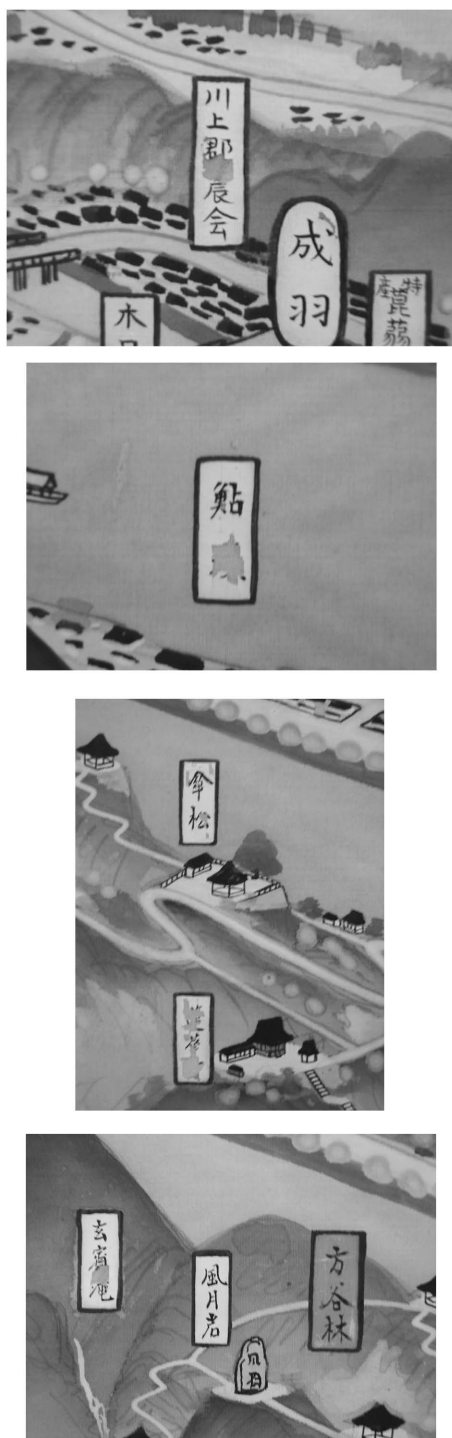


図4 絵具の剥落状態

### 修復工程

本紙料絹(絵絹画面)をビニールで覆われたベニヤ下地から外し、画面上に吸湿紙を用いてクリーニングを行った。全体に薄い膠の水溶液を塗布して絵具層の剥落止めを施した。

絵具の浮上・亀裂および剥落・部分の修復を蒸気ペンやサクシオンテーブルを用いて行った。

図 5

新調した額下地に和紙にて下張りをを行った。(骨縛り・胴締め・箕掛け3回・箕締め・下浮貼・上浮貼・浮貼締め)本紙料絹(絵絹画面)を和紙にて裏打ち(2回)を施し、下張りを施工した額下地に張り込んで額縁装に仕立てた。



図 5 修復処置



図6 本紙張り込み



図7 修復後

### 修復過程で得られた情報と考察

本紙料絹(絵絹画面)は昭和5年に描かれたまま、手が加えられた形跡のない状況を保っていた為に、絵具や絵画技法に関していくつかの情報を得る事ができた。

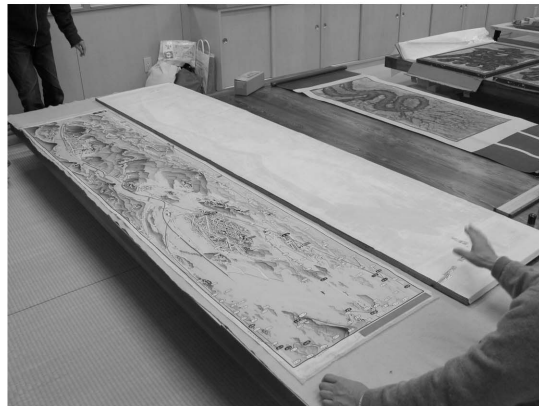


図8 修復前の本紙

本紙料絹(絵絹画面)制作の一般的処置である「にじみ止め」のドーサ引きや、絵絹画面を描くときに用いる木枠に張られた形跡が見られない。図9(日本の美術10「古代絵画の技術」至文堂)

絵絹画面の耳(両端)には図10のような伸子(針の付いた竹ひごのような道具)張りの後が確認された事から、吉田初三郎が10歳で京友禅図案絵師の元で丁稚奉公し、さらに京都三越百家店図案部に勤めた経歴を考えると友禅染めの技法図11で描かれた可能性が考えられる。

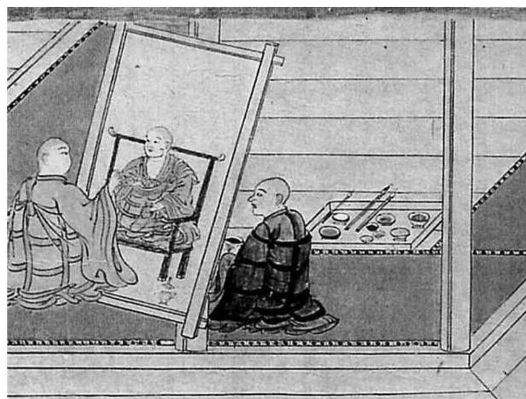


図9 絵絹画面の描き方

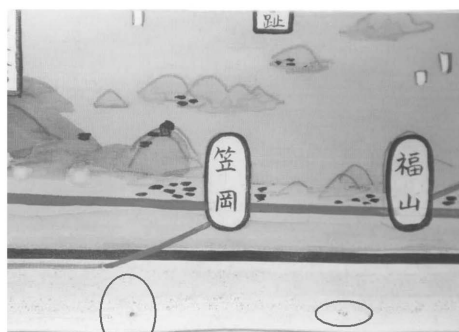


図10 伸子針の跡



図 11 染め絵の描き方

23 歳で単身上京して黒田清輝らの白馬会にて洋画技法を学び、25 歳のときに京都に戻り、フランス帰りの鹿子木孟朗との出会いにより商業デザイナーとしての道を進んだ吉田初三郎が使用した絵具は鉄道沿線図の注文が集中した昭和初期は、年間に 50 作から 100 作(生涯 1600 点以上)の工房での大量制作に入り、その結果として日本画用絵具(泥絵具)から昭和初期に日本で普及しはじめた不透明水彩絵具・ガアツシュが用いられた可能性が考えられる。



図 12 初三郎工房での共同作業  
(別冊太陽「吉田初三郎のパノラマ地図」平凡社)

#### 絵具について

泥絵具とは、岩絵具などと同じく膠の溶液を固着材として使用する日本画用絵具で、顔料や染料を白土や胡粉と一緒に水のなかで粒子わけした(水簸)後に天日で干した微粒子の絵具で、膠で溶く前に乳鉢で空擦りを行う。手間のかかる絵具ではあるが、安価ゆえに芝居の看板絵や神社の絵馬などに多く用いられている。水干絵具ともいう。

他方、ガアツシュは、みづゑと称されたように、水で溶くだけで使用出来る水彩絵具の一種で顔料にアラビヤゴム・グリセリン・エチレングリコールなどを固着材として練り合わされた絵具である。特徴として厚塗りや重ね塗りが出来、透明水彩絵具と同様に絵具の色のびが良く、均質性に優れる。18 世紀後半から 19 世紀始めにフランス・ドイツなど使用されはじめる。

日本でガアツシュを用いる絵画技法が使用されるのは昭和 5 年頃から新人の洋画家たちが用いた。

時、同じくして、吉田初三郎の工房では観光案内・鉄道案内の鳥瞰図を大量制作に入り、初三郎が下絵を描き、



弟子たちが仕上げる。商業デザイナーおよびプロダクション方式を確立する

初三郎は「大正広重物語」のなかで、日本画顔料や特殊塗料を駆使して鳥瞰図を年間 50 から 100 種制作なされた(吉田初三郎のパノラマ地図 P108)と書かれている。

この特殊塗料がガアッシュかと推測される。

## おわりに

大正、昭和と一世風びした、初三郎は昭和 3 年「旅と名所」創刊号に「私の仕事・・・洋画と日本画との融合の上に基礎を置いて、是に色彩、描線、図様を働かせ、真に特色ある近世名所図絵を完成し、之を後世に伝えて大正・昭和に生まれたる日本特有の芸術としての存在を示し、人文史上に明白な印跡をのこしたい」と、志を書いていることを踏まえ、吉田初三郎式観光鳥瞰図の年次ごとの調査を通して、絵具や絵画技法についての考察を深めてゆきたいと考えている。また、修復処置を終えた「伯備沿線鳥瞰図」はデジタル撮影(3 億 5 千万画素)が行われた。このことが、高梁市の町おこしや活性化および本学の教材として活用されることが望ましい。

## 参考文献

別冊太陽「吉田初三郎のパノラマ地図」, 平凡社

日本の美術 10「古代絵画の技術」, 至文堂

「画材の博物誌」, 森田恒之著 中央公論美術出版

「画材と素材の引き出し博物館」, 目黒美術館編 中央公論美術出版

本研究は、一部文部科学省学術フロンティア推進事業(平成 15 年度～平成 19 年度)による私学助成を得て行われた。

